

ヴァイマル期ドイツの空襲像

—未来戦争イメージと民間防空の宣伝—

柳原伸洋

はじめに

(1) 戦争における空間拡大と時間短縮

第一次世界大戦中に本格的な使用が始まった飛行兵器は、いわゆる「速さ×時間＝距離」の公式内で速さの値を劇的に増加させ、同時間内での到達距離の伸長、同距離に対する到達時間の短縮をもたらした。また、単線的な距離だけではなく、空の兵器は地形にほとんど左右されることのない飛行半径を有し、その攻撃対象地域を拡大させた。これに対する軍事的な防衛手段は、航空戦闘機による空中戦と高射砲を用いた作戦のみである。さらに航空兵器と同時期に導入された毒ガス、そして、第一次大戦末期に、実戦投入段階にまで開発が進められていた高性能焼夷弾（エレクトロン弾）は、攻撃対象地域を面から空間へと一気に拡大させることを可能とする。つまり、毒ガスは生存空間を毒化・汚染し、焼夷弾は物体を燃やし生命活動に不可欠な酸素を消尽させるという新たな攻撃方法であった。これらによってもたらされた新戦争形態は、「空中戦争（Luftkrieg）」と呼ばれた。このように空爆・毒ガスは急速に戦争空間を拡大させ、銃後の地域、とくに爆撃対象としての都市の上空に露出した全表面をフロント（前面＝前線）とすることを可能にした。これにより、国家対国家の「全面」戦争という構図がより強いリアリティを伴って大衆の戦争イメージに入り込み、社会内での戦争認識は変容していった。

ドイツは、1918年の敗戦によって、「大崩壊（Megazusammenbruch）」を経験した¹。これは、軍事的・経済的・政治的側面だけでなく、心理的な崩壊も意味する。そして、崩壊後の精神的な空白部分に、たとえば巨首伝説、仮想敵への敵愾心、そして包囲妄想などが入り込み、ヴァイマル共和国社会のあらゆる領域に無視できない影響を及ぼした²。

本論文は、戦争形態の変容を背景とし、当時支配的であった「空気」の一種として戦争イメージを据え、ヴァイマル期における未来戦争ないしは空中戦争のイメージとその利用について分析することを目的としている。

(2) 先行研究と本研究の目的

戦後長らく、ヴァイマル史研究は共和国の草創期と崩壊期に焦点が当てられてきた。これは、ボンの連邦共和国において、ヴァイマル共和国の挫折という負の側面に関心が寄せられた結果である³。1980年代後半から、共和国が存在した「14年間」を対象とし、共和国崩壊の必然性に帰着しない研究が出はじめ、そこでは様々な「危機の諸相」をめぐる研究が進められた。ここでの「危機」は、ポイカート（D. Peukert）の研究が示す「古典的近代」もしくは「前期近代」が社会政策、技術や自然・人文科学、さらに芸術、建築などの分野で終焉を迎えはじめ、不確定性の時代へ突入していく様を意味

したが、その後、グラーフ (R. Graf) とフェルマー (M. Föllmer) が知識人における危機の意識に焦点を当てた研究を行なった⁴。本稿はこれらの研究に依拠しながらも、戦争イメージという分析対象を用い、知識人という限定性を取り去り、危機の意識を別角度から照射する。つまり、ヴァイマル期共和国における「戦争の意味」を問うことで⁵、「危機の時代」の新戦争 (空襲) と民衆の関係を考察するてがかりとしたい。

そこで本稿は、ヴァイマル期ドイツを第一次と第二次の大戦の間の戦間期ととらえるのではなく、終わった戦争 (第一次世界大戦) と予期された戦争 (未来戦争) の間の時期として捉え、「未来戦争 (空襲) の恐怖」をキーワードとして「危機の時代」の一側面を考察していく。未来戦争の「予言」に関して、1. でドゥーエ (G. Douhet) とゼークト (H. von Seeckt) の未来戦争観を、2. で未来戦争小説について俯瞰する。次に3. で、主題である空襲の恐怖について、空襲・防空小説と実際に大衆宣伝活動を実施した民間防空団体の宣伝分析へと進みたい。

1. 戦争の預言者と指導者：ドゥーエとゼークト

1914年の大戦勃発直後に「従来の戦争と現在の戦争は比較しえない」として「伝統を破壊して現在を変革することで、未来を見通す者こそが戦争の天才である」と著し⁶、未来の戦争形態を予測した人物が、イタリアの将軍ジュリオ・ドゥーエである⁷。彼は、独立空軍による敵都市中枢への爆撃という航空主兵主義を著作『制空論 (1921)』にて提唱した⁸。ドゥーエは、同書内で塹壕戦による第一次大戦の長期化と兵士の大量死を例に挙げ、これを克服する手段として、航空兵器を局地的な戦術ではなく戦争の趨勢を決する戦略として最大限利用すべきだと主張している。都市爆撃によってインフラ設備を破壊、そして経済の混乱などを惹起せしめ、さらに民心に恐怖心を与えることで戦争士気をくじき、敵を内部崩壊に至らしめる打撃を与えるというのが彼の理論であり、そのためには毒ガス爆撃の実行も辞さないとしていた⁹。

彼の著作内で、ドイツという国家は特別な意味をもっていた。ひとつには、ドイツが戦争をさらに継続できた状態にあったにもかかわらず、いわゆる「背後からの一突き」による内部崩壊によって敗戦を喫したという認識を彼が抱いていたことである¹⁰。また、高度テクノロジー化した戦争では、技術分野においても軍民の境界は希薄になる。つまり、民間航空機は航空兵器に転用可能であり、化学研究はたやすく毒ガス兵器への実用化が可能であるとドゥーエは考えた。ここでは、ヴェルサイユ条約によってヴァイマル共和国に課せられた軍備制限はさしたる意味をもたないのである。

では、ドイツの軍関係者の空襲・毒ガス攻撃認識はどのようなものだったのであるうか。一例として、ライヒ国防軍 (Reichswehr) の軍統帥部長ゼークト (任1920—1926) の空戦認識に踏み込んでみたい。祖父の代からのプロイセン軍人の家系で1866年生まれの子孫は、19世紀後半の軍事的成功を少年期に間接的に経験した「ポスト英雄世代 postheroische Generation」に属し、騎兵による突進・突撃、そして兵士対兵士の対称的な戦争という君主戦争時代の戦争観を保持する世代に属していた¹¹。その彼が統帥部長を務めていたことに加えて、事実上、航空兵力を奪われたドイツでは空戦理論はあ

まり発達しなかったといえる。

しかしながら、ゼークトは空戦力を完全に否定していたわけではなく、「次の戦争は、彼我空軍の攻撃をもって開始せられるであろう。空軍は最も速やかに戦闘の準備を整えうるのみならず、敵への接近も最速で実行する戦闘力」と考えていた¹²。彼は、未来の戦争が運動力（機動力）によって左右されると認識していたので、陸・海軍の補助部隊として空軍の果たす役割は大きいと考えていた。それゆえに空戦指導に関係した将校180人をライヒ国防軍内に残し¹³、また彼らをソ連での秘密軍事演習や航空兵器実験に派遣した。

さらに、未来の戦争は第一次世界大戦よりも明確に「国民対国民」の戦争となり¹⁴、国家の内奥が空襲された際には、国民の精神的な抵抗力が決定的に重要となると考えた点¹⁵では、ドゥーエと同じであった。だが防空に関しては、実際の防空活動に当たるのは軍隊であり、また軍事的先制攻撃が有効であると考えていた¹⁶。ただし、民衆に次の戦争の「脅威」を啓蒙する上で民間防空活動の必要性は認めていた。

2. 未来戦争小説とヴァイマル末期の空襲・防空小説

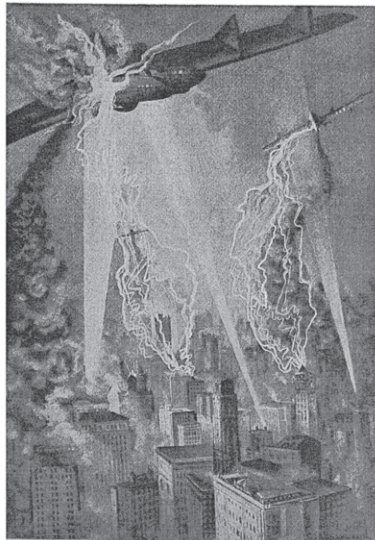
1920年代のドイツの書店には未来を予見したフィクションが数多く並べ置かれており、これらの作品にはヴァイマル期の政治的な危機的状況と不可分な心理状態が反映されていた¹⁷。本章ではその中でも特に空爆戦争および防空活動に関連した未来小説を取り上げて考察したい。

(1) 戦争ユートピアとディストピア

未来戦争、その中でも「空中戦争」に触れた未来小説としては、一次大戦前のイギリスにおける、オデル(S. Odell)の『最終戦争—英語者の勝利(1898)』、ウォータールー(S. Waterloo)の『アルマゲドン(1898)』、そしてウェルズ(H. G. Wells)の著名な作品『世界戦争(1897)』や『空中戦争(1908)』などが挙げられるであろう。ウェルズの『空中戦争』内の、ニューヨーク空襲の叙述にもあるように、空爆は死をもたらす「空の死神」であり現代文明破壊の象徴というイメージで描かれている¹⁸。しかし、オデルなどの作品では、空の支配による「野蛮」の陶冶、それによる民主主義・平等・平和の到来という「近代のユートピア」が叙述されており、空爆戦も少数の機械兵同士の「クリーンな戦争」として描かれる¹⁹。世界帝国としての威信を失いつつあり、「パクス・ブリタニカ」の終焉を迎えていた世紀転換期のイギリスでは、このような楽観的ヴィジョンが未来戦争小説中に反映されていたといえる。

これに対して、ヴィルヘルム期・ドイツでは社会の軍事化が進行しており、戦争のロマン化や戦争により自分たちが繁栄、もしくは世界全体が安定に至るといった「戦争ユートピア(Kriegsutopien)」を語る作品が比較的多かった²⁰。たとえば、クラウスマン(A. O. Klaußmann)の『未来の空爆戦争(1908)』は、強大な空軍力を行使して世界を席卷せんとするイギリス帝国に対し、ドイツ軍が電波を用いた防空兵器でイギリスの爆撃機部隊を撃退し、平和条約が締結されるといったストーリーであった²¹。

その後、第一次世界大戦の敗戦を経験したドイツの未来小説は「戦争ユートピア」にとどまる内容もまだ多くあったが、いくつかの作品では、すでに実戦使用された毒ガスや爆撃の経験から想像された「未来の脅威」がテーマ化されていった。この「脅威」の影響から、二つの小説タイプが新たに姿を現した。ひとつは戦争自体への警告を描く、反「戦争ユートピア」もしくは「戦争ディストピア」小説であった。たとえば、エーアハルト (O.Ehrhard) の『ガラスの塔 (1927)』は以下のごとく未来戦争を描写する²²。西暦5200年の世界は「アメローパ」と「アジネーゼ」に二分されており、お互いが兵器や毒ガスなどで大量殺戮を繰り返すことで、世界は破滅へと至る、という物語である。このように、時代、登場国ともに架空の設定だが、毒ガス兵器によって世界が破滅するという内容は第一次世界大戦後の社会と深く結び付いたものだと見える。



出典：Ehrhard, Der gläserne Turm, in: Münch (2006) の表紙より

そしてもう一方では、戦争の「脅威」を国防精神 (Wehrgeist) の涵養に向けさせる小説が出現した。本論ではこれを、来るべき将来戦争を描いた「空襲・防空小説」と名付けて以下で扱う。これらはすべてヴァイマル末期に出版されたものである。特に敗戦を経験したドイツでは、想像された「脅威」が現実味を帯びやすい環境があったと考えられる。これに関しては、次章「民間防空の宣伝」で触れることとして、ここではまず、経験から創作された空襲・防空小説について考察したい。

(2) 空襲・防空小説

戦争宣伝の部局担当者となり、引退後もイタリアで執筆活動を続けていたドゥーエは、1930年に『19・・年の戦争』を出版する。これは、仮想未来の19××年にドイツとフ

ランスが戦争を開始するというフィクションであったが、登場する国家名は実在のものである。この筋書きをまとめると「ドイツの空戦兵器がパリを先制爆撃し、これによりパリ市民の多数が都市部から逃げ出す。そしてフランス国民は政府に対して停戦を訴えかけるようになる。このためにフランスは敗戦に追いやられ、この戦争はあっけなく早期終結を迎える」というものである。ドゥーエは、この架空小説の中で自らの戦略爆撃理論の効果を描き出している²³。さらにここでも、彼にとって自らの爆撃理論を証明するための重要な国はドイツであった。

しかし、1921年の『制空論』では爆撃理論において傑出した著作を残したドゥーエだったが、1930年頃には、ドゥーエの架空物語よりも「できのよい」空襲小説がドイツで出版されている。たとえば、ヘルダース少佐 (Helders²⁴) が32年にドイツで出版した、『空爆1936 パリの壊滅』である。ヘルダース少佐という名は、ルフトハンザ社長ミルヒ (E. Milch) の片腕であるロベルト・クナウス (R. Knauss) の用いたペンネームであった²⁵。彼は、この作品中で、フランスとイギリスが戦争するといった架空の設定をする。そして、イギリス王立空軍 (RAF) は極秘裏に高速飛行能力を有した長距離爆撃機を製造しており、イギリス軍はその爆撃機によってフランス国民の士気を粉砕するために、兵器工場と民衆への強襲爆撃を実施する²⁶。さらに『空爆1936』の「できのよさ」は、イギリス空軍内の航空兵器戦略についての議論をも鮮明に描出した点である。物語の主演、イギリス空軍のウイントン大尉は、空軍の果たす役割の時代的变化を確信している。つまり、(第一次)世界大戦のように戦闘機同士の空中戦が空戦略の主目的ではなく、以後の空軍は、爆撃を中心とした軍編成となると主張するのである²⁷。ここには、ゼークトラの属した「ポスト英雄世代」とウイントン大尉、つまり著者クナウスの属する若い世代との対立が描かれている。新世代の意見が採用された結果、1トン級の爆弾や高性能焼夷弾の使用、そしてマスタードガスのパリへの投下が実行される。それらがパリ市民に死と混乱をもたらした結果、全土に恐怖が蔓延し、フランスは二週間という短期間で敗戦するというストーリーだ。展開と結末はドゥーエとほぼ同じといえるが、クナウスの詳しい描写は彼の立場上知りえたことを描いたものであり、いわば内幕の事情通による著作であった。すでに彼は、当時の空軍事情についてドゥーエよりも多くの知識を持っていたと考えられる。

次に、1933年にアクセル・アレクサンダー (A. Alexander) 著『ベルリン会戦』を取り上げたい。これは、ボルシェヴィキ・ソ連がポーランドを征服し首都ベルリンに迫りくる、という物語である。この中で、ベルリンはソ連空軍からの激しい爆撃を受けることとなるが、市民による民間防空の徹底によりその困苦を耐え、イギリス、イタリアなど西側諸国の空軍の援護を受けてドイツが反攻に転じ、最後にはソ連軍を撃退する。物語中、ドイツ国内には防空壕やガスマスクが完備されていて、ベルリン市民は慌てることなく、落ち着き注意深くそして団結して空爆に耐え抜く様子が描かれている。ここでは、ドゥーエの戦略爆撃理論に書かれたような民間人の士気低下は、民間防空の徹底によって防ぐことができるものとして叙述された²⁸。

これらを第一次世界大戦前の空襲小説と比較したい。まず、現存の国家名を使うことで「リアルさ」を演出する点は共通している。しかし、空襲が民間人に及ぶという点、そして民間防空による団結や精神的な抵抗の重要性などが新たに叙述されている。

ここに紹介した小説は、未来の戦争が民間人を対象とした空爆戦争となるとする点で、「戦争ユートピア」ではなく、むしろ「戦争の苛烈さ」を描写しながらも国民の精神的抵抗の重要性を強調する点が特徴的である。

また、ヴァイマル時代にこれらの仮想未来戦争小説が出版された背景には、「来るべき戦争」としての空襲と国防への関心がある。そして、クナウスやアレクサンダーの作品は、空爆の脅威を伝え、民間防空を広める活動の一環として、軍や準軍事団体関連の出版社から発行された。つまり、空爆や空軍の知識を宣伝し、ドイツが危機的な状況にあることを民衆に認識させるものである。そして、これらの小説でも描かれている「脅威の現状」を様々なメディアに乗せて宣伝していたのが、次に言及する民間防空組織であった。

3. 民間防空の宣伝

1. の軍人の未来戦争構想は、後述の民間防空組織成立、そして本稿では詳しく述べないが防空訓練実施に関しても重要な役割を果たす。また、2. で述べた未来戦争小説は、クナウスの例が示すように小説と民間防空宣伝・動員にも一定の関係が存在していた。しかし、未来戦争小説内における空襲イメージが、いかに民間人へ影響を及ぼしたかを知ることは極めて困難である。そこで本章では、あと一歩進め、民間防空組織の啓蒙活動と空襲イメージについて、そしてそのイメージがいかに伝達されたかについて考察したい。

(1) 空襲像の啓蒙機関：民間防空組織

まず手短かにヴァイマル期の民間防空組織について説明する。ヴェルサイユ条約により、ケーニヒスベルク以外では、航空兵器はもちろん高射砲を用いた防空活動(軍事的防空)は禁止されていた。しかし、民間人の防空訓練が、どこまでヴェルサイユ条約177条「各(民間)組織の軍事的活動の禁止」、178条「戦争動員の禁止」に抵触するかは、いわばグレーゾーンであった。

このような背景の下で、民間防空に関する本格的な議論は1923年1月のルール危機にはじまる。このベルギー・フランスのルール占領は「ルール戦争」と呼ばれ、ドイツが再び戦争状態へ陥ったと認識されることもあった。これに対し、首相クーノ(W. Cuno)は「消極的抵抗」を提唱したが、その裏でゼークトは準軍事組織と接触していた。これら二者の意図は「民間防空」において符合する。つまり、一方で、民間防空宣伝により国民意志をまとめあげ、民心の不安状態を克服し内部崩壊を防ぎたい政府側、他方でドイツの危機的状況を民間防空によって宣伝し再軍備へと駒を進めたい軍部、これら二つの意図が重なり合うのである。だが、1923年2月から5月の一連の民間防空措置をめぐる会議において内務省と国防省の意見は一致をみず、民間防空の具体的措置は棚上げとなった²⁹。

その後、1924年からのいわゆる「相対的安定期」には、シュトレゼマン(G. Stresemann)のヴェルサイユ条約遵守の考えから、防空活動は対外的に国家とは無関係な「私的なこ

と(Privatsache)」と定義された³⁰。民間防空はこの後しばらく公的な議論にとりあげられなかったが、1926年のパリ航空協約内でドイツにおける民間航空業務の再開(ルフトハンザの運航)と連動し、ドイツ国内における民間防空活動も公式に許可される。ここで活躍したのが、産業界と強い結び付きのあったドイツ国民党(DVP)の交通・運輸大臣クローネ(R. Krohne)であり、彼は1927年に設立されたドイツ防空協会(Deutscher Luftschutz e.V)の会長となり、本格的な民間防空の宣伝活動に着手した。クローネの空戦イメージは、ドゥーエの空戦理論と一致しており、「来るべき戦争」において国民の抵抗心がくじかれぬことを第一に考えて民間防空活動を展開していこうと意図していた³¹。

その後、右派から左派まで、さまざまな民間防空団体の林立と統合が1933年まで繰り返されるが³²、本論では啓蒙活動の主流をなしたドイツ防空協会(1927-32)、防空連盟(Deutsche Luftschutzliga, 1929-1932)、防空連合(Deutscher Luftschutzverband, 1932-33)関連の記事や資料を主に扱い、民間防空の宣伝内容を具体的に述べ、「空襲イメージ」や「脅威」の宣伝と動員への利用の側面を考察する。まずは「未来空襲イメージ」がドイツで広く流布した契機について言及したい。

(2) 毒ガス事故と未来戦争の恐怖

空爆、とくに毒ガス爆撃についてのイメージは20年代後半にドイツで広く普及した。その契機は、まさに新時代の戦争とテクノロジーの関係性を象徴的に示す「偶発的な事故」であった。

1928年5月20日ハンブルク郊外のヴィルヘルムスブルク、有毒ガス・ホスゲン(塩化カルボニル)を製造する工場で爆発事故が起きた。これによって11名の死者と300人以上のガス中毒者という被害が報告されている³³。工場の所有者はフーゴ・シュトルツェンベルク(H. Stoltzenberg)であり、第一次大戦中にフリッツ・ハーバー(F. Haber)の助手として毒ガス製造に従事した化学者である。国内では「工業用」と称してホスゲンを製造し、ハンブルク港からスペインへと輸出していた。さらに、彼はそれが戦争協力としてヴェルサイユ条約に抵触しないよう、国籍をスペインに変更するまでの周到さであった³⁴。

この事故は、ドゥーエが指摘していた新技術の民用・軍用の境界性の消失を象徴していた。シュトルツェンベルクの工場での事故は新聞で大きく取り上げられ、民間人を死に至らしめた毒ガスの威力に関するニュースは、未来の毒ガス爆撃の恐怖を想像させる契機となった³⁵。これにより、防空・防毒も同様に注目を浴びはじめる。1927年にはさほど多くはない防空関連記事が、28年、29年には一気に増加する。たとえばベルリンで発行されている新聞の空戦・防空・防毒関連記事は、1927年に11記事、28年には206記事、29年(3月まで)で111記事であった³⁶。



出典: *Die Woche*, Heft.11 (1931)の表紙より

(3) 戦争イメージの宣伝手段

このように新聞は防空宣伝の重要なメディアであった。この宣伝方法について、1931年12月9日にベルリンのプレスハウスにて、後にナチス防空組織のナンバー2となるエーリヒ・ハンペ(E. Hampe)が「ドイツでの民間防空 —新聞報道と防空」と題して講演している³⁷。この講演には、大臣、官僚、国防軍の上官たち、そして、報道関係者や防空に関心のある団体の代表者たちが出席していた。まず、ハンペは、「防空問題と新聞・報道の関係については、一刻も早い対応が必要である。まずは、新聞と防空の関係者に、お互いに対するの深い理解が行き渡ることが第一歩だといえる」と、防空と新聞報道のあり方の基本的指針を示した。そして、彼は新聞の特徴を、「新聞には魔法的な力がある。なぜなら、活字はそのことを事実だと信じさせてしまう力があり、そして新聞は公共の意見の代表者であるとみなされているからだ」と講演した。

ハンペの理解では、民間防空は技術的・組織的問題に留まらず精神的問題であった。またドイツ全国民が来るべき空襲下で自己防衛を遂行するためには、新聞や報道が効果的な民衆啓蒙の手段であるとした。そして、演説の終盤に、彼は民間防空にまつわる「誤解」を解くために民間防空の報道に関して4つの綱領を提示した³⁸。

- I. 民間防空は、軍事的・政治的問題ではなく、生命を守るための自己理解による活動である。
- II. 民間防空の諸活動は、完璧な防備を目指すものではなく、効果的な防御の可能性を高めるものである。
- III. その効果は、民間人の参加意欲によって高められる。つまり、平時の準備が大切である。
- IV. 民間防空活動への意欲を高め防空知識を広める使命は、主に新聞などが担う。

Iはヴェルサイユ条約などに配慮したもの、IIは民間防空の無意味さについての反論、IIIは平時での防空活動への参加士気の低さ(サボタージュ)への反論、IVはメディア利用について、この講演自体のまとめを意味している。

ハンペたち防空指導者の活動により、防空記事はその数を増やしていく。この演説についてもベルリンで少なくとも11紙が記事として掲載し、たとえば31年12月11日の「ベルリナー ロカール・アンツァイガー紙(Berliner Lokal-Anzeiger)」には、「ドイツは四方八方からの爆撃機襲来に脅かされている」と題された記事で、ドイツで軍事的航空が禁止されている間に、他国は多くの爆撃機を増産している。また、高射砲に関しても、フランス750基に対し、ドイツ81基であることを具体例としてあげ³⁹、ハンペの演説記事に加えて、具体的な他国との比較を掲載した。また、ハンブルクではイギリス海軍の砲撃の危険性などの例もあげられ、その地域に特有の「脅威」も付加されて宣伝された⁴⁰。

他には展示会やフィルム上映を通じて、空襲イメージと民間防空は宣伝されていった。1932年5月8日から、ケルンのライン公園で民間防空に関する最初の大規模な展示会が開かれた。「財産と生命の防護(Der Schutz von Eigentum und Leben)」と題したこの展示会の開会式では、内務兼国防大臣グレーナー(W. Groener)の挨拶が予定され⁴¹、会期中には防空専門家の講演会が催され、警察、消防、技術緊急救助隊、そして赤十字の保健衛生部局などの実践的な公演会もあった。写真や映画などを用いた視覚的要素が強い展示であり、国家や行政を通じた共同体防衛と、各個人の自己防衛のそれぞれをテーマとした展示が設置された。より具体的には、国家と個人の防衛のために、科学技術や工業そして運輸が、防毒や防空技術にどのように活かされているかを説明したものであった⁴²。

1932年2月、ドイツ防空連合は防空に関する資料館をベルリンのマルティン＝ルター通りに開館させた。ここで、映像資料を安価で貸し出し、防空に関する講演会や勉強会での資料利用を促進した。このフィルム・リストの一部を列記すると、「カリフォルニアの海岸におけるアメリカ空軍演習」、「軍事国家の空軍による爆撃演習」、「君自身を守れ」、「プレーメンの対毒ガス訓練」、「工場防空」などと題されたフィルムが置かれていた⁴³。これらは講演会の説得力を増すため、また、当時の新メディア、映像・映画により集客力を上げるために用いられたと考えられえる。たとえば、1932年4月19日には、防空専門家グロスクロイツ(H. Großkreutz)が「空の脅威、その防御可能性」という講演を行った際に、「アメリカの空軍」という映画を放映し、講演に説得力をもたせた⁴⁴。これからわかることは、民間防空への関心を集め参加を促すために、新たなメディアである映像を使って戦争の「脅威」を宣伝したことである。



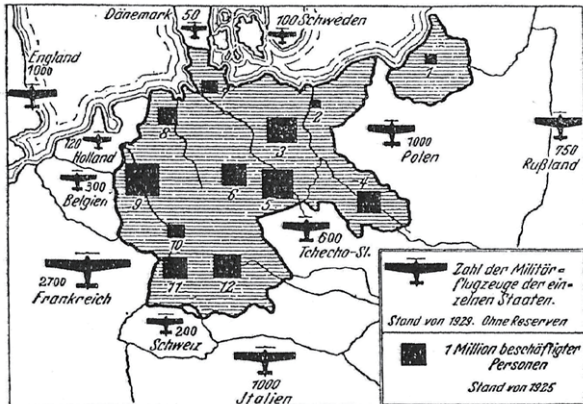
ケルン防空展示会 出典: *Gasschutz und Luftschutz*, Nr.7, Juli.1932, S.155.

(4) 宣伝内容: 未来の空襲の「脅威」

民間防空とは、どのような未来戦争イメージをもって広められたのであろうか。当時、民間防空関連の記事や書籍から、防空推進の主張を裏付けるためのテーマをそれぞれ具体的にまとめてみたい。

a. ドイツの地理的条件

民間防空組織は、ドイツ国土が周囲の仮想敵国からの空爆や毒ガス爆撃の脅威に晒されているということ積極的にアピールした。東西南北を他国に囲まれたドイツの地理的条件を引き合いに出し、爆撃機の飛行半径を用いて、国土が完全包囲されていると訴えた⁴⁵。そして、その脅威に対して、諸州の分立状態を統合し国家的一体性を持った「統一ドイツ」を要請したのである⁴⁶。



周辺国の軍用機所有数とドイツ国内の労働人口 (100万人単位) を示した図

出典: *Gasschutz und Luftschutz*, Nr.1, Okt. 1931, S.7

また、ドイツ諸都市と人口稠密率については、「ドイツは、1平方キロメートル当たり140人の住民がおり、フランスは75人、ポーランドは82人、ロシアは15人である。ただ、イギリス(264人)とベルギー(265人)だけがドイツよりも人口密度が高い。また、ドイツの都市には全人口の65%が居住しており、人口30万以上の17都市の住民数は1260万人に達し、イギリスの1000万人、フランスの400万人を超えている。」といった数値が多く利用された⁴⁷。このように具体的なデータからどれほど危機的であるかを示し、民衆に対し防空の必要性を訴えかけた。ここで、比較対象に挙げられている国々はすべて周辺国であって、これらがすべてドイツの仮想敵国とされたといえる。

b. 他国の状況

民間防空を發展させるにあたり、他国空軍の状況や防空組織の形態が頻繁に宣伝され、様々な目的で利用された。第一に、諸外国の防空活動の情報からドイツにおける防空活動の不足を示し、活動の必要性を訴えた。第二に、民間防空の方法や手段を学びとる目的である。第三には、外国の空軍力を示しそれらを「脅威」として伝達する目的であった。たとえば、雑誌『防空会報』は「軍事的防空」と「民間防空」に続いて「諸外国の防空」というコーナーを設けており、フランス、イギリス、ポーランド、チェコ、ルーマニア、ベルギー、ノルウェー、そしてアメリカの防空情報が掲載されている。ここでは、ドイツが十分な防空活動が実施できていない状況が他国との比較において強調されている。たとえば、フランス大統領が、1931年11月25日に「空襲に対する消極的防衛(=民間防空)の実施訓令」を發布し、ペタン元帥(H. P. Pétain)がフランス防空総監に就任したというニュース⁴⁸やイギリス王立空軍の大演習について『防空会報』に掲載された。

また、当時、日本の対中国爆撃についてのニュースがドイツでも報じられている。1931年から日本軍は、中国軍艦船などを攻撃し制空権を完全なものとし、次いで各都市への空爆を実行していた。このニュースは、すぐさま民間防空の宣伝として報じられた。

(日本軍による中国都市爆撃は、)将来戦における空軍力の価値の証明となった。ただし、中国には組織的な防空準備がなかったために、このような事態を日本人に可能にさせたのである。…(中略)…日本の上海爆撃は、軍事的空軍を装備していない国や、それが不十分な国への最初の警告となった⁴⁹。

このような日本軍のニュースは、ドイツ国内の新聞各紙でも一面に掲載されるほどであった。防空団体は、この情報を空襲の具体的な事例として未来戦争の「リアルさ」を補強するために用いたのである。

c. 将来戦の予測

将来の戦争規模については、第一次大戦を引き合いにして現時点での規模を算出した記述が見られる。たとえば、「1918年の10ヶ月間でドイツ本土内に投下された爆弾は僅か193トンに過ぎなかったが、将来戦が勃発した場合は、最初の24時間にフランスは250キロの侵入距離内に360トン、侵入距離500キロ内に215トンの爆弾を投下す

ることができるだろう」といった内容である⁵⁰。ここでは第一次大戦中の空爆の規模や被害状況を述べ、それが終盤に加速度的に発展したことが強調された。他には、ケルンの防空展示の開会式の際に、警察の防空部局長も（第一次）世界大戦での加速度的な技術進歩と犠牲者数の増大を引き合いに出し、「将来戦の脅威」を強調した⁵¹。毒ガスの使用禁止に関する国際条約への不信が一般的に流布していたこともあり、未来の空襲では毒ガスが使用されることは前提となっていた。

d. 民衆の戦争士気

戦争士気への影響について、防空指導者グリメ（H. Grimme）は、通信技術の向上を例にとって説明した。つまり、メディアの影響力は情報伝達技術の向上によって増大し、他都市の空爆のニュースがすぐさま広まっていく状況が生み出されたということである。これは、前項b.の日本のニュースの取り上げられ方にも示されている。

また、彼は、1930年前後のナチズム運動が「宣伝力や伝達力によって高揚し、異常な膨張を達成した」という例をあげ、「もし将来、戦争が勃発した場合、即座に国内の全住民が敵爆撃の恐怖の影響下に置かれるのである。これを平時の訓練や教育により、自己の義務として遂行するようにせねばならない」と語っている⁵²。

(5) 民間防空宣伝における未来戦争の「脅威」

このように民間防空の宣伝は、未来の空襲の「脅威」・「危機」を共通項としているが、ただ単純に不安感を煽るだけの一辺倒な伝達ではなかった。そこでは、前述したような様々な具体的データを用いて「脅威」の説得性を強化し、個人の生命と国家の存続を直結させて緊急性を強調するといった手法が用いられた。そして、この「脅威」は宣伝主体である防空指導者によって恣意的に管理・操作されていた。つまり、第一次世界大戦ですでに糜爛性の猛毒マスタードガスが使用されていた現実や、高性能焼夷弾にとって民間防空の徹底はむしろ民間人の死者を増やすことにつながりかねないといった危険性は無視されていた。

この「脅威」の操作について科学的見地から批判を加えたのが、スイスの化学者ヴォーケル（G. Woker）であった。「未来の戦争において、毒ガスなどの化学兵器が空爆と組み合わせられて用いられる場合、民衆を守ることは不可能であり、よって兵器そのものを放棄するか、戦争でのその使用を禁止しないかぎり平和には至らない」という化学兵器使用の全面禁止を求めた⁵³。

そして、このように毒ガス禁止の運動に携わったヴォーケルは、防空活動は戦争へと導いているだけだと批判した。彼女は、「防空の必要性を騒ぎ立てる人々は我々の安全にとって最大の敵である。なぜなら、彼らは意味を成さない戯言によって、みなを騙し安心させている。そして、毒ガス爆撃の真の恐ろしさとその対処法を学ばせることを妨害しているからである」と攻撃した⁵⁴。

防空宣伝側からすれば、現実の脅威の直視は「反戦」といった戦争そのものへの否定につながる可能性を秘めており、民間防空への動員を妨げるものであった。たとえば、「スウェーデンは防空宣伝、教育を徹底させる一方で、過度の宣伝を避け住民を煽動しないように努めている」と、スウェーデンの例を引き、防空宣伝における住民の不

安感の調整が重要であると指摘されている⁵⁵。

そして、単純に安心感を教え込むのではなく、100%の完璧な防衛はできないと認めることで、国家防衛の方法や可能性を語ることは効果的であった。また、一方で防空が貫徹されない場合は「血の海」になるといった恐怖が語られた。このようなイメージを植えつけることで、民衆の士気低下に伴う国家の抵抗力の低下を抑えようとした。この宣伝には、カリスマ的指導者の力は必要なかった。ただ、宣伝活動における「空爆脅威」の情報の管理があれば十分であったのである⁵⁶。

最後に—イメージから自発的参加へ

本論ではこれまで、①未来戦争と「来るべき」戦争がどのように構想、そしてイメージされたか(1, 2章)、②民間防空宣伝において「空襲」の脅威イメージがどのように利用されたか(3章)、について考察した。

本稿最初に、航空兵器を用いた戦争形態の特徴としてその空間的拡張と時間的短縮に言及したが、ここまでの行論で、戦争イメージとの関連性においてそれ以外の特質も浮かび上がってきた。つまり、毒ガス爆撃を含めた「空中・化学戦争(Aero-chemischer Krieg)」という構想の下では、誰もが戦争に直面する可能性が増大し、それに伴い以下の認識上の意味変容が生じた。もしくは、防空宣伝側はこういった戦争認識へと転換させようとした。

まず空間的には、航空兵器同様に近代兵器である毒ガスや焼夷弾は、火事、ガス事故などの災害と戦争の境界性も曖昧にし、日常空間の危険と戦争空間の危険を重ね合わせる特質もっていた。民間防空の宣伝内においては、航空兵器が境界を飛び越え、都市内部まで到達するということが、空間防衛(防空)に際して「国家という空間」が限定的に想定され、逆に境界を際立たせる状況を生み出した。

次に時間的には、戦争の新形態は戦時と平時の時間的な境界を曖昧にさせ、戦争が「すでに始まっている」、「まだ終わっていない」、もしくは「今にも始まる」という感覚を強化し、平時の日常生活内において戦争の意味を増大させた。そして、この戦時と平時の曖昧化によって、むしろ未来の空襲が「来るべきもの」というイメージはより具体的なものとなったのである。

これら未来の空襲イメージは実際に社会を動かす原動力として利用された。それが、防空団体による、想像された空襲を利用した国防への民間動員であったといえる。そこでは「自発性」が重要なタームとなっていた。

先述のグロースクロイツは、著作『空爆!そしてドイツは?(1931)』の中で、「民間防空活動を精神・組織・技術によって構成されるものとして紹介し、防空施設建設と違い費用がかからないものである」と述べる⁵⁷。このような言及は、ドイツ防空協会の創成期に、政府との折衝の中でその活動費用が障害となったことと関連していると思われる。大恐慌後のドイツ社会の中で民間防空の必要性を正当化するためにも、費用がかからない「自発的な」参加が必要であると訴えたのである。このように「自発的な国防参加」が民間防空のキータームであった。

他にも「空襲の脅威」を克服するために、防空活動は、第一次世界大戦の「フォルクスゲマインシャフト (Volksgemeinschaft)」⁵⁸を想起させる超党派的な活動としてまた国家的団結のもとに構築されていくべきであると宣伝された。たとえば、クローネの目指した防空組織像も、防空協会の指示のもとに政府、各分野の専門家、そして使命感を持った市民が連帯してゆくという構想であった。ここでクローネは、「国民の自発的意志による民間防空の組織化は、民主化の達成でもある」としている⁵⁹。そして、国民に対して、自分たちが近代兵器(爆撃機や毒ガス兵器など)の攻撃対象であるという意識を与えることができれば、軍部が強く国防活動参加への要求をせずとも、自発的に「国民は軍隊組織」となると理解していた⁶⁰。

この「自発性」を促進するためには、「空襲の脅威」を調整する必要がある。つまり防空宣伝は、「適度な脅威」によって自国防衛への参加意志を恐怖によって増幅させたり敵愾心を増大させたりすることで、民衆を防空活動に自主的に参加させようと促した。ヴァイマル期に「未来戦争」が「来るべき戦争」としてイメージの内で「リアルさ」を増していながらも、民間防空団体などがそのイメージを国防共同体への動員のための宣伝に利用する際にはフィクション性を内在させていた。民間防空宣伝における「脅威」の喚起とその宣伝は、国家存立の正統性を欠いた(多数の人々はそう考えた)ヴァイマル共和国の精神的空洞が「脅威」によって埋められた事例である。しかもそれは国家と国民(大衆)を媒介する点に位置していたのである。

- 1 Schivelbusch, Wolfgang, *Die Kultur der Niederlage. Der amerikanische Süden 1865, Frankreich 1871, Deutschland 1918*, Frankfurt a. M.: Fischer, 2003, S.15-17. 福本義憲ほか訳『敗北の文化 敗戦トラウマ・回復・再生』法政大学出版局、2007年、5頁も参照。
- 2 Encke, Julia, *Augenblicke der Gefahr. Der Krieg und die Sinne. 1914-1934*, München: Wilhelm Fink Verlag, 2006, S.9.
- 3 Jochen, Vogt, The Weimar Republic as the „Heritage of our Time“, in: Kniesche, Thomas W. / Brockmann, Stephen (ed.), *Dancing on the Volcano. Essays on the Culture of the Weimar Republic*, Columbia: Camden House, 1994, pp.21-28.
- 4 Föllmer, Moritz / Graf, Rüdiger (Hrsg.), *Die „Krise“ in der Weimarer Republik. Zur Kritik eines Deutungsmusters*, Frankfurt a. M.: Campus-Verlag, 2005; Graf, Rüdiger, *Die Zukunft der Weimarer Republik. Krisen und Zukunftsaneignungen in Deutschland. 1918-1933*, München: R. Oldenbourg, 2008.
- 5 「戦争の意味」に関しては、チュービンゲン大学が1999年から「戦争体験 近代における戦争と社会」として広範に取り組んでいる。
- 6 「未来派」と題され、新聞 *Gazzetta del Popolo* (1914年9月24日)に掲載された記事。ドゥーエとイタリアの芸術運動「未来派」との近似点は多い。ギャットの論考において、未来派創始者マリネッティ (F. T. Marinetti) とドゥーエの関連性について言及されている。参考: Gat, Azar, *Fascist and Liberal Visions of War*, New York: Oxford University Press, 1998, p.57f.
- 7 ドゥーエの空戦理論が、ヨーロッパ全土とくに軍部に対してどれほど影響力を持っていたかは、慎重な議論を必要とする。たとえば、イギリス王立空軍では第一次世界大戦末期から航空戦思想が生み出されており、ヒュー・トレンチャード (H. Trenchard) などに代表される空戦略家によって発展を遂げていた。しかし、ドゥーエの空戦理論が軍と民間双方の知識人の考え方の特徴をよく表わしていることから、「未来戦争=空爆戦」として、ドイツ国内でも頻繁に引用されていた。参考: ウィリアムソン・マーレイ『ドイツ空軍全史』手島尚訳、朝日ソノラマ、1988年、7-8頁。Murray, Williamson,

- Strategy for Defeat: The Luftwaffe, 1933-1945*, Maxwell (Alabama): Air University Press, 1983.
- 8 Douhet, Giulio, *The Command of The Air*, New York: Coward-MacCann, 1942.
- 9 参考: Vauthier, Paul, *Die Kriegslehre des Generals Douhet*, Berlin: Rowohlt, 1935; 生井英考『空の帝国 アメリカの20世紀』講談社、2006年、143-144頁; 前田哲男『改訂版 戦略爆撃の思想』凱風社、2007年、53頁。
- 10 Douhet, *op.cit.* p.106.
- 11 「ポスト英雄世代」については、Schivelbusch, *a.a.O.*, S.232f.; Münkler, Herfried, *Der Wandel des Krieges. Von der Symmetrie zur Asymmetrie*, Weilerswist: Velbrück Wissenschaft, 2006. を参照。
- 12 von Seeckt, Hans, *Gedanken eines Soldaten*, Berlin: Verlag für Kulturpolitik, 1929. 引用は、ゼークト『一軍人の思想』篠田英雄訳、岩波書店、1940、67頁。
- 13 マーレイ、前掲書、24頁。
- 14 同、82頁。
- 15 ゼークト、前掲書、67頁。
- 16 von Seeckt, Hans, *Luftschutz*, in: *Die Woche*, Heft.11(1931), S.336.
- 17 Fisher, Peter S., *Fantasy and Politics. Vision of the Future in the Weimar Republic*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1991.
- 18 Wells, H.G., *Der Luftkrieg*, Stuttgart: Hoffmann, 1909 (2.Auflage).
- 19 Lindqvist, Sven, *A History of Bombing*, London: Granta Books, 2002, paragraphs 43-90.
- 20 Münch, Detlef (Hrsg.), *Science Fiction Erzählungen und Kriegsutopien in deutschen Periodika. 1880—1949*, Dortmund: synergen Verlag, 2005, S.14.
- 21 Klaußmann, Anton Oskar, *Der Luftkrieg der Zukunft*, in: *Bibliothek der Unterhaltung und des Wissens*, 1908(2), S.218-222; 所収、Münch, Detlef (Hrsg.), *Der Krieg der Zukunft vor 100 Jahren, Bd.1: Vorkriegsjahre 1900-1913*, Dortmund: synergen Verlag, 2006, S.14-18.
- 22 Ehrhard, Otto, *Der gläserne Turm*, in: *Bibliothek der Unterhaltung und des Wissens*, 1927(10), S.5-13, 16-37; 所収、Münch, Detlef (Hrsg.), *Der Krieg der Zukunft vor 100 Jahren, Bd.3: Nachkriegsjahre 1919-1928*, Dortmund: synergen Verlag, 2007, S.57-79.
- 23 Douhet, *The War of 19__*, in: *op.cit.*, pp.223-316; Corum, James, S., *The Luftwaffe. Creating the Operational Air War 1918-1940*, Kansas: University Press of Kansas, 1997, p.102.
- 24 ベンネームなのでファーストネームはない。
- 25 Corum, *Ibid.*, p.102.
- 26 Major Helder(Knauss, Robert), *Luftkrieg 1936. Die Zertrümmerung von Paris*, Berlin: Traditions Verlag, 1932.
- 27 *ebenda.*, S.40.
- 28 Alexander, Axel, *Die Schlacht über Berlin*, Berlin: Verlag „Offene Worte“, 1933; Corum: *op.cit.*, p.103.
- 29 BA-MA, R43II / 1295, Nr.995, Denkschrift T2 III vom 15.2., 21.3., 18.5.1923.
- 30 Lemke, Bernd, *Luftschutz in Großbritannien und Deutschland. 1923- 1939*, München: Oldenbourg, 2005, S.140.
- 31 Krohne, Rudolf, *Luftgefahr und Luftschutzmöglichkeiten in Deutschland*, Berlin: Deutscher Luftschutz e.V., 1928.
- 32 Müller, Rolf-Dieter, *Die chemische Geheimrüstung in der Weimarer Republik*, in: Steinweg, Reiner (Hrsg.), *Lehren aus der Geschichte?*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp Verlag, 1990, S.244-247.
- 33 Engelhard, Hermann, *Hamburger Phosgentage*, in: *Die Gasmasker*, Juli.1929 (Heft.3), S.51-57.
- 34 Presas i Puig, Albert, *Continuities in Radical Change. The Technological Relationships between Germany and Spain in the 20th Century*, Berlin: Max-Planck-Institut für Wissenschaftsgeschichte, Reprint 298, 2005; Kunz, Rudibert / Müller, Rolf-Dieter, *Gifigas gegen Abd el Krim. Deutschland, Spanien und der Gaskrieg in Spanisch-Marokko 1922-1927*, Freiburg: Rombach, 1990.
- 35 大衆雑誌『ヴォッヘ (Die Woche)』は、1931年3月に「毒ガスの脅威」の特集を組み、そこでもガス事故と戦争の毒ガスを重ねた記述がなされている。前掲のゼークトの記事もここに掲載された。*Die*

- Woche, Heft.11(1931). 本文に同雑誌の表紙絵を掲載。
- 36 Haeuber, Erich / Gassert, G., *Der Kampf um den Luftschutz*, Berlin: Deutscher Luftschutz e.V., 1929. をもとに集計。
 - 37 Hampe, Erich, Presse und Luftschutz, in:*Luftschutznachrichtenblatt* (以下、*LNB*. と記す) (Jan., 1932), S.9-17.
 - 38 Hampe, ebenda., S.16.
 - 39 Berliner Lokal-Anzeiger (11.12.31), in: *LNB*. (Jan., 1932), S.17.
 - 40 *LNB*. (Feb., 1932), S.36.
 - 41 実際は、内務大臣が病気のため演説は中止となった。*Ebenda.*, S.101.
 - 42 „Der Schutz von Eigentum und Leben“ Sommerausstellung im Rheinpark zu Köln, in: *LNB*. (Jun., 1932), S.101.
 - 43 Lichtbilder und Filme für Luftschutzvorträge, in: *LNB*. (März., 1932), S.50.
 - 44 Luftschutzvortrag in Berlin, in: *ebenda.*, S.50.
 - 45 Von Bülow, Luftrüstungen des Auslandes und Wirkungsmöglichkeiten der Bombenflugzeuge auf Deutschland, in: *Gasschutz und Luftschutz*, Aug. 1931, S.3-6; Bogatsch, Das Luftschutzproblem, in: *edenda*, S.6-13.
 - 46 Fritzsche, Peter, *A nation of fliers. German aviation and the popular imagination*, Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1992, p.694.
 - 47 グリムメ、フーゴ『獨国防空團』陸軍航空本部、1937年、6頁。
 - 48 Frankreich. Aufklärung und Erziehung der Bevölkerung, in: *LNB* (Feb., 1932), S.34.
 - 49 Luftschutzübungen und Manöver, in: *LNB* (Sept., 1932), S.165.
 - 50 グリムメ、前掲書6頁。
 - 51 „Der Schutz von Eigentum und Leben“ Sommerausstellung im Rheinpark zu Köln, in: *LNB* (Jun., 1932), S.101.
 - 52 グリムメ、前掲書、7頁。
 - 53 Woker, Gertrud, *Der kommende Giftgaskrieg*, Leipzig: Oldenburg, 1925; Riesenberger, Dieter, Der Kampf gegen den Gaskrieg, in: Steinweg, Reiner (Hrsg.), *a.a.O.*, S.266.
 - 54 Riesenberger, edendaの註39 (S.272)によると、このビラは1929年にベルリンで10万枚まかれた。
 - 55 コールス「外国ノ民間防空」ハムベ(ハンベ)、エーリヒ他編『民間防空 防空関係諸問題集』陸軍航空本部、1937年、245頁。当時、スウェーデンでは徹底した防空教育がなされていた。参考:Lindqvist, *op.cit.*, paragraphs 166-173.
 - 56 Lemke, *a.a.O.*, S.164f.
 - 57 Großkreutz, Hans, *Lufkrieg! und Deutschland?*, München: Barbara-Verlag, 1931, S.9.
 - 58 フォルクスゲマインシャフトは「民族共同体」、「国民共同体」などの訳語が存在するが、ここでは第一次世界大戦時の概念なので、後者を採用する。
 - 59 BA Berlin 601 / 1324, Aufsatz „Errichtung eines wirksamen Luftschutzes“ vom 10.12.27.
 - 60 Lemke, *a.a.O.*, S.141f.

Vorstellungen vom Luftkrieg in der Weimarer Republik - Die ersten literarischen Vorstellungen des Zukunftskrieges und die Luftschutzpropaganda -

Nobuhiro Yanagihara

Die Veränderung der Kriegsform des 20. Jahrhunderts, die die Erfindung des Flugzeuges mit sich gebracht hatte, dehnte zum einen den Kriegsraum auf die Heimat und verkürzte zum anderen die Zeit bis zum Eintreffen des Krieges in der Heimat.

Die Niederlage Deutschlands im Ersten Weltkrieg bedeutete nicht nur den militärischen, ökonomischen und politischen Zusammenbruch, sondern auch ein psychologisches Fiasko. Um die leere Stelle nach dem Zusammenbruch im psychischen Sinne zu füllen, schuf man die Dolchstoßlegende, Belagerungswahn und Feindseligkeit gegen den imaginären Feind, welche von weiten Teilen der Bevölkerung akzeptiert wurden.

1. Ein Luftkriegstheoretiker und ein führender Vertreter des Militärs -Douhet und von Seeckt

Giulio Douhet, italienischer Luftkriegstheoretiker, veröffentlichte 1921 seine Theorie in dem Buch, „Luftherrschaft“. Er war der Ansicht, dass die Luftwaffe, die in das Herz des feindlichen Staates fliegen und mit Brandbomben oder Giftgase die Infrastruktur einer Stadt zerstören und gleichzeitig die Moral der Stadtbewohner schwächen könne und dass diese Strategie die Hauptrolle im nächsten Krieg spielen werde.

Hans von Seeckt, der Chef der Heeresleitung der Reichswehr, sah die zukünftige Aufgabe der Luftwaffe als Hilfskraft in einem mobilisierten und mechanisierten Krieg. Der General hielt die Luftwaffe nicht für gleichermaßen wichtig wie Douhet, weil er noch zu der postheroischen Generation gehörte. Dennoch glaubte er, dass der Zukunftskrieg sicherlich ein Krieg unter Aufbietung sämtlicher Ressourcen werden und der Sieg von der Moral der Nation abhängen würde.

2. Zukunftskriegsliteratur und Luftkriegs- und Luftschutzliteratur der Weimarer Republik

Im Vergleich zu Großbritannien tendierte die deutsche Zukunftskriegsliteratur vor dem Ersten Krieg zu Kriegsromanen, die dem Krieg manchmal als Utopien darstellten. Aber nach dem Weltkrieg erschienen neue Typen der Zukunftskriegsliteratur in Deutschland, in denen sich die Erfahrung des Weltkrieges mit Giftgas- und Bombenangriffe widerspiegelt. Diese Literatur wird in diesem Beitrag als Luftkriegs- und Luftschutzliteratur bezeichnet. Sie schilderte den Schrecken der Bombardierung, die die Demoralisierung der Zivilbevölkerung bezweckte, was jedoch dank der Luftschutzaktivitäten verhindert werden konnte.

3. Luftschutzpropaganda

Die Luftschutzorganisationen, die in der letzten Hälfte der 20er Jahre gegründet wurden, hatten die Absicht, die Zivilbevölkerung durch die Propaganda zu mobilisieren. Manchmal geschah dies aus Anlass alltäglicher Unglücke. Zum Beispiel gab der Unfall der Giftgasfabrik des Chemiker Stoltzenberg Anlass dazu, die Bevölkerung über die Schrecken des Gasluftkrieges aufzuklären.

Die Luftschutzpropaganda wurde erfolgreich durch die Medien, z.B. Zeitungen und Ausstellungen verbreitet.

Die zusammengefassten Inhalte der Propaganda waren,

- a) die geographische Lage Deutschlands, weil Deutschland von allen Großmächten, die Bombengeschwadern zur Verfügung hatten, eingekreist war.
- b) die Informationen über Luftwaffenmanöver und Luftschutzaktivitäten im Ausland.
- c) schreckliche Visionen zukünftiger Luftkriege
- d) die Förderung der Vorbereitung zur Zusammenarbeit des gesamten deutschen Volkes gegen den künftigen Luftkrieg

Das Ausmaß der „Bedrohung“ wurde von den Luftschutzorganisationen in der Luftschutzpropaganda willkürlich manipuliert. Denn das Gefühl einer starken Bedrohung in der Bevölkerung hätte der Anti-Kriegsbewegung Vorschub leisten können.

In diesem Beitrag wurde Folgendes erklärt,

1. die Konzeption des Zukunftskrieges und die Vorstellung vom kommenden Luftkrieg
2. die Vorstellung der bedrohlichen zukünftigen aero-chemischen Kriege bei der Mobilmachung des zivilen Luftschutzes.

Das Flugzeug verdeutlichte im räumlichen Sinne die Grenze zwischen Heimat und Front. Giftgas und Brandbomben verwischten die Unterschiede zwischen Unglück und Krieg. Dagegen verstärkten diese neuen Kriegstechnologien in der Luftschutzpropaganda das Gemeinschaftsgefühl in der Bevölkerung.

Im zeitlichen Sinne ließ die neue Kriegsform den Unterschied zwischen Kriegs- und Friedenszeit verschwimmen, so dass der Zukunftskrieg als sicher kommender Krieg angesehen wurde.

Eine sehr wichtige Rolle spielte in der Propaganda der Luftschutzorganisation die Tatsache, dass man aus eigenen Antrieb handelten, um finanzielle Probleme zu lösen und den Volkskörper zu verstärken.

Dafür produzierte die Luftschutzorganisation die „mäßige“ Bedrohung der Zivilbevölkerung. Während der Weimarer Republik nahm das Realitätsbewußtsein in der

Vorstellung des Zukunftskrieges zu. Indem die Teilnahme der Zivilbevölkerung an dem zivilen Luftschutz von dem Luftschutzverein aber gefördert wurde, benutzte er für die Mobilisierung der Bevölkerung die Fiktionalität in der Propaganda.

Durch die oben erwähnte Argumentation wurde eine neue Perspektive der Kultur der Niederlage mit dem Terminus „Bedrohung“ erläutert.